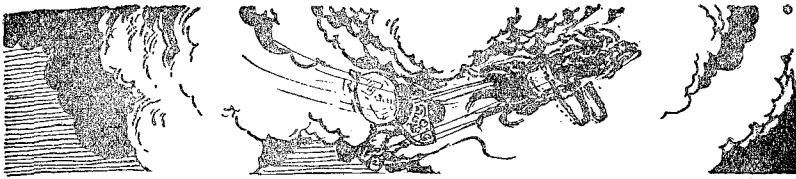


Title	雑報と消息
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1927), 7(73): 169-172
Issue Date	1927-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161094
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



雑 報 と 消 息

○ハセイ教授逝く 米國ミシガン州アンナボア (Ann Arbor) 大學の「デトロイト」天文臺長 W. J. Hussey 氏は 1862年八月10日米國オハヨ州に生れた。家が貧しく、若い頃は學校教師や測量師などをやつてゐたが、1889年ミシガン大學の土木工學部を卒業し、暫く、ワシントン市の航海曆編纂局に勤めたことがある。しかし、間もなく母校ミシガン大學に招かれて、三年間、數學及び天文學の講師をつとめ、兼れて「デトロイト」天文臺の臺長事務を取つた。次いで1892年にはカリフォニア州スタンフォード大學の天文學助教授に任ぜられ、三年後には其の正教授に昇進した。此の頃、彼は近くにあるハミルトン山上のリック天文臺を屢々訪ひ、かのローダム (Rordam) 彗星の研究などによつて名を擧げた。1896年彼はバーナードの後任としてリック天文臺員となり、大「三十六吋」望遠鏡を以つて、ペライン氏等と共に彗星や二重星の測微觀測に従事し、其の優秀な技術は A. J. 誌の主筆チャンドラーを驚嘆せしめた。ハセイは1905年までリックに居たが、其の間に、エイトケン氏と共に北天に於ける二重星の總調査 (Durchmusterung) を敢行し、其の結果、1338對の新二重星を發見し、ために、1906年にはフランスのアカデミからラランド金牌を授與された。1905年十月に彼はまた母校ミシガン大學に招き歸されて、天文學教授兼「デトロイト」天文臺長となつた。其れからは銳意此の天文臺の設備改善に努力し、遂に1911年には「37吋半」の大反射望遠鏡を完成した。之れと殆んど同時に、南米アルゼンチン國ラプラタ (La Plata) 大學

の交渉を受けて、遂に其の天文臺長を兼ねることとなり、爾來、ラプラタミアンナボアに時間の半々を送ることにした。又、二十四五年も以前から、ハセイは南天の二重星を觀測するため、いろいろの計畫を立て、現にラプラタでは三百對餘の新二重星を發見した程であるが、尙ほ、一方に於いては天文臺の新敷地を搜索すると共に、他方に於いては大望遠鏡の設計製作等を企てた。1922年以來、彼はブラシア工場で「二十七吋」レンズを磨かしめたが、1925年に之れが完成したので、いよいよ新天文臺を南アフリカ英領のブルムフォンテイン (Bloemfontein) に設立することに決め、昨1926年秋、ロシター氏と共にアンナボアを出發したのであつたが、不幸にして英京滞在中ホテルで客死した。(前號參照。)

○ドナーチの百年記念 Nature 誌に據るに、昨1926年十二月16日はイタリヤ國の天文學者ドナーチ (Giovanni Battista Donati) の誕生日から一百年目に當るのであるといふ。ドナーチと言へば直ぐあの**大彗星**の發見者たることを聯想するが、實際、彼は其の外にも五回の彗星發見をやつてゐるのであつて、即ち下記の通り。

- 1, 1854年第四號彗星 (同年九月18日發見)
- 2, 1855年第二號 (同年六月3日發見)
- 3, 1857年第六號 (同年十一月10日發見)
- 4, 1858年第六號 (同年六月2日發見)
- 5, 1864年第三號 (同年七月23日發見)
- 6, 1864年第一號

(同年九月9日発見)

ドナチはイタリア國ヒサ市に生れ、26歳の時、フイレンツェ (Firenze) 天文臺に入つて臺長アミーチ (G. B. Amici) 教授の助手となり、1863年にアミーチが死んで、翌年ドナチが臺長となり、其の後、四十六歳で死するまで十年間此の地位に居た。彗星の発見は皆此のフイレンツェ天文臺で行はれたものであるが、尚ほ其のほか、彼は星のスペクトルを研究し、1864年には彗星のスペクトル中にガス體のあることを発見した。又、恒星なスペクトルによつて物理的に分類することの可能性を公言した。1860年七月18日の皆既日食を彼はイスパニア國トレアランカで觀測したこともあつた。彼は1873年八月オーストリアのザーン市に開かれた國際氣象會議に列席中、コレラに感染し、同年九月二十日、アルチエトリの自宅に歸着するさ間もなく死んだ。

○米國より日食遠征隊行く 來る六月29日の日食觀測に、米國ヴジニア大學では、J. A. Chaloner といふ富豪の寄附金によつて、同大學天文臺長 S. A. Mitchell 氏が、ノルエーへ出張することになつた。ミチエル氏の目的は太陽雲圖氣、殊に紅暈の觀測であるから、こんどのやうな短時間の皆既日食にも差支へは無いわけである。

○ロンドン理學博物館の天文部開設 英京ロンドンの南ケンシントン (South Kensington) にある理學博物館 (Science Museum) 内に、去る1926年12月1日から新しく天文部 (Astronomy Gallery) が開かれ、同12月29日の大英天文協會 (B. A. A.) の例會に、上記の天文部の擔任者であるバクサンダル (D. Baxandall) が大體の説明をした。其れによると、元々、1876年に博物館の舊西室 (Western Galleries) で、天文教育や研究上の參考品と共に、いろいろ天文史に關係ある出品を陳列したことがあり、其の時には Airy, Huggius, Lockyer, Main, Earl of Rosse, W. de la Rue 等の天文家が斡旋したのであるが、此度の天文室には當時の出品が**ばやり**陳列せられてゐるのであつて

主な興味を惹くものは、

ガリレオが作つた望遠鏡(數箇)、

上記の複製品、

トリチェリ (Torricelli) の望遠鏡の複製品 “Christopher Cock, Londini, 1673” の署名ある望遠鏡、

(此のゴクは、昔ニウトン、フラムステッド、フク等の使つたレンズ類を作つた人)

第十七世紀末から十八世紀初め頃 Howe, Marshall, Mann 等の作つた望遠鏡類、

ドロンド商會の初期の色消望遠鏡 (其の中の二つは1758—1761年頃の作、“John Dollond & Son” の署名あり)、

ニウトン原作の反射望遠鏡、Scarlett, Short, Martin 等製作 (1738—1760年) のグレゴリー式反射鏡、

「六呎」ロス卿反射鏡のモデル、

上記の鏡面(實物)、

アラビヤ製アストロラーベ (1067年頃) の複製品、航海用アストロラーベ (第16世紀)、

十字棒、

Backstaff;

初期のハドレイ作の八分儀 (Octant);

クック (Captain Cook) の使用した六分儀 (Sextant);

テイヒヨ・アラーへの象限儀 (quadrant) 複製;

ハル (Hull) のシニア (W. Senior) 作の小型象限儀、

Sisson Bird 製の天文用象限儀、

Dollond 及 W. & S. Jones 作の携帯用赤道儀、

ハーシエルや South が (1821—23年頃) 二重星觀測に用ゐた「5呎」赤道儀、

1806年 Troughton 製の「4呎」子午儀 (Groombridge が用ゐたもの)、

トーマス・ライト (Th. Wright) 作の三球儀、

Senex 作の天球儀二個

W. ハーシエルが「7呎」ニウトン式望遠鏡製作に用ゐた道具、

W. ハーシエル作の「7呎」ニウトン式反射鏡、

サー J. Herschel が 1839 年に初めて作つたガラス寫眞板 (父ハーシエルの Slough) に

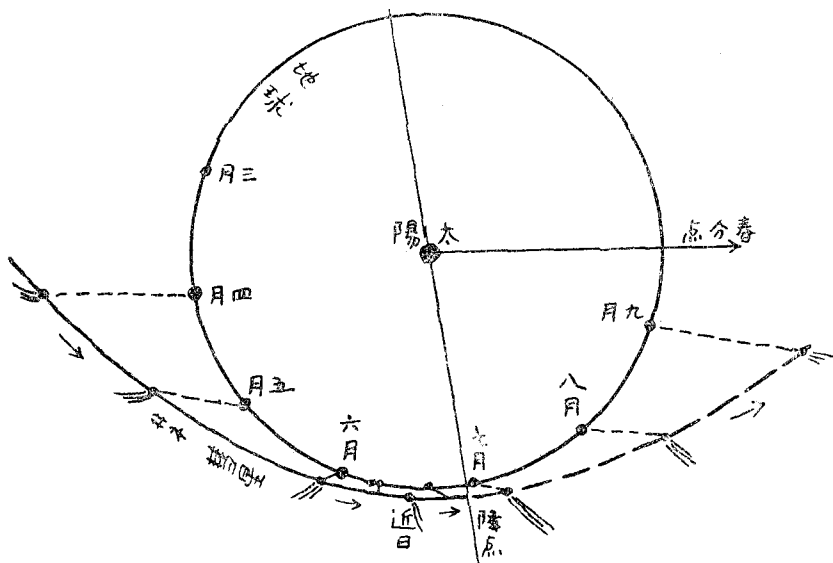
ある「40呎」反射鏡の陰畫),
サー J ハーシエルが1840 年に用ゐた分
光器,
Wハーシエル作「90分の1吋」焦點距離の
接眼玉,

●中ンネケ彗星來らん

去る1921年に地球へ近づいて或る迷信
社會を騒がせたかの有名なボン・キンネ
ケ彗星(Pons-Winnecke's comet)が今1927
年もやつて來る。今年は非常に珍らしく
地球に近づき、六月の下旬には $\frac{1}{20}$ 單位
(即ち60000000キロ、或は15000000里)
にも近づくので、英國のクロメルン老
などは「月に次ぐ近距離だ」と言つて人々
の注意を促がしてゐる。尤も今は未だ發
見されてゐないが、近いうちに世界の誰

かゞ發見するだらう。(此の前の1921年に
はヤーキースのバーナードが發見したの
であつたが、バーナードは今や故人とな
つてゐる。)

此の星は光輝は左程大きくならないか
も知れないが、盛んな流星群を伴うの
で有名である。1921年の時は京都大學の
中村氏が非常に澤山の流星を六月末から
七月初め頃に觀測したが、其の後一二年
間、同氏が見た経験によつて、此の流星
雨は六月の初めから八月頃まで見えると
言つてゐられる。特に今年は此の流星雨
が未曾有の壯觀を呈するだらうと豫想さ
れてゐるので、京都大學でも六七月頃何
等かの方法で特別な觀測プログラムを具
體化しようと思ひ下計畫中である。本會觀



測部の流星課も大に準備して好い成績を
得たいものである。

●新しい彗星三つ

今1927年になつてから既に三つの彗星
が發明された。三つは何れも新しいもの
らしい。1927a 彗星——之れは去る一月
13日の1時28分(Gリニチ特)に南アフ

リカのブルムフオンテイン (Bloem
fontein)のブラスウェイ (Blathwayt) 氏が
發見したもので、

赤經=15h 44m 0s 赤緯=-29°46'
光度は9等0であつた。此の星は其の後南
へ行き二月二十日頃南緯 70°に達し、其
の後再び北上して來るが六月以後の曉天
エリダン座に見える筈である。

1927b 彗星——之れは去る一月26日の19時43分5(グリニチ特)に南アフリカのケイプタウン市にゐるリード(W.Reid)氏が発見したもので、當時

赤經=22h 30m40s 赤緯=-57°49' 光度は8等0で、東行しつつあつた。此の星も暫は南天にあるが、三月末がらエリダン座を北東に運行しつつ、四月にはオリオン大星雲附近を通過する筈である。(ブレテン第103號)

1927c 彗星——之れは三月十日の10時4分8に米國ミドルタウン市エスレイ大學助教授ステアンス(Stearns)が発見したものであつて、當時

赤經=15h 16m0s 毎日16s 西へ

赤緯=+2°38'17" 同 19' 北へ

光度は10等0であつた。之れは可なり好都合に觀望し得られるであろう。

但し何れも10センチ以上の望遠鏡が必要である。(三月十七日)

●ハーバード學院天文臺の新出張所

近着報によれば、米國ハーバード學院天文臺(Harvard College Observatory)は今般南アフリカ英領オレンジ自由州(Orange Free State)首都ブルームフォンテイン(Boemfontein)(東經26°10',南緯2

9°7')に新しく一出張所を設けることになつたといふ。

近時、歐米の天文臺が南亞や南米に出張所を設けることが益々盛んとなり、一種の流行のやうに皆南天の研究をもくろんでゐる。今試みに有名なものを列記するこゝ、

經營者 出張所

米國リグ天文臺 南米チリ國サンチアゴ同ハーバード學院

同ベル國アレキバ

同 同 同チリ國

同 同 南阿ブルームフォンテイン

同スミソン學院 南米チリ國モンテズマ

同 エール大學 南阿シヨハネスバーグ

同 アンナホア大學

南阿ブルームフォンテイン

蘭國ライデン大學

南阿シヨハネスバーグ

獨國ボツダム天文臺

南米ボリザア國ラバツ

尚、「出張所」とは言へないが、特別な親密關係にあるものは、

英國グリニチ天文臺 南阿ケープ天文臺

米國アンナホア大學 南米ラプラタ大學

米國リグ天文臺 同コルドバ天文臺

獨國ゲッティンゲン大學 同ラプラタ大學

本會ブレテン第百號を越ゆ

本會觀測部の機關誌として發行されてゐる英文「ブレテン」は去る一月三十一日の第100號を發行した。そして此の第100號には、第1號以來の既刊號の記事の總索引を載せた。

ブレテン第1號が出たのは過ぐる大正十年(1921年)十二月12日であつて、其の後、今日まで五年有餘。但し、其のうち1923年九月から1925年五月まで約一年半の間は資力不充分のため發刊を中止してゐたから、發刊期間中だけの平均を取つて見ると、毎月2・3號づつとなる。

ブレテンの内容は、彗星、流星、太陽、變光星等の天文現象を、豫報及び報告することから、各天文台や天文家たちの動靜や、會の諸種の會合等に至るまで、いろいろ々々であつて、中には又、各種の研究論文の概要も載り、又、船橋や銚子の無線電信局から毎日發信される精密時刻の修正値も近頃載せられるやうになつた。

本會の觀測部員としてブレテンの無代配布を受けてゐる人が約百人、其の他、交換として此のブレテンは全世界の約百ヶ所の天文台へ送られてゐる。第65號より引き續いて毎號之れが宮中に献上せられつゝあるのは言ふまでも無い。

將來は、觀測部員の數をもつと増して、發行部數を多くし、從つて又、觀測部費を廉にし、ひろく一般會員たちに讀んで貰ひ、學界の近狀に接して貰ひたいものである。